

〈論文〉

J=J・ルソーにおける山岳と歩行

田中恒寿

序論

ルソーはフランス文学の歴史において、初めて山岳の風景美を表現したとされる。とくに『新エロイズ』の山岳描写は、当時の人々の山岳観を劇的に変化させるほど、大きな影響力を持った。このような一般論、すなわち、ヨーロッパにおいてルソーが山に対する意識の変容に重要な役割を果たしたということは、いわば教科書的常識ともなっているほどだが、その後に但し書きを付け足す論者も少なくない。例えば、「ルソーは実際にはアルプスを知らなかったし、関心もなかった」¹⁾という具合である。

そこから導き出される結論は、大きく分けて二通りに分類できるようだ。一つはルソーの描く山のイメージは文学的想像力の産物であり、荒々しいアルピニズムとは無縁の、いわゆる「イギリス庭園」風の穏やかで心地よい自然に還元することが可能だとするもの。もう一つは、確かにルソー自身はアルピニズムを実践しなかったとしても、その精神はH=B・ドゥ・ソシュールを初めとする近代アルピニズムに受け継がれたとするものである。

ところで、桑原武夫は山の文学を便宜的に、「遥かに山を眺めた文学」、「山の中を歩いている文学」、「山に攀じる文学」の三つに分類している²⁾。山岳風景の賛美は、多くの部分を眺めること、すなわち視覚に負うものであり、事実、『新エロイズ』の山岳描写もそのようなものとして読者に受け入れられた。ルソーの山に庭園風の自然を見る態度は、主としてこのピクチャレスクな面を強調したものと言えるだろう。だが、ルソー自身の山岳体験は、視覚に偏重した「眺める」だけのものではない。ルソーは好んで山を「歩き回った」人である。山と言っても、標高千数百メートルから、せいぜい二千メートルそこそこ、確かに本格的なアルプス登山に比べればたいしたものではないのかもしれないが、それでも、まだ山を魔物の住家とするような中世的な迷信から完全には抜け切れていない当時にしては、ルソーが自ら進んで山に登ったという事実自体、「たいしたこと」なのではないだ

ろうか。しかし、だからといって「攀じる」方面に引き付けて、近代登山の始まりを告げるモン・ブラン初登頂の仕掛人H=B・ドゥ・ソシュールを、直接ルソーの影響下に置くことについても、疑問がないわけではない。山に関しても、ルソーは矛盾に満ちた存在なのだ。

ところで、ルソーが徒歩旅行と山をたいそう愛好していたことは、『告白』の中で自ら証言しているとおりであるが、両者をそれぞれ独立したものとして解するのは適当ではないように思われる。「眺める山」にも「攀じる山」にも片寄らないで、「歩行」を核としたかわりという観点からルソーの山をとらえ直すことが、小論の目的である。第一章で、ヨーロッパでの山に対する意識感情の変遷におけるルソーの位置付けを確認した後、第二章では、ルソーの歩行の特質を明らかにする。第三、四章では、ルソーの歩いた山の表現を分析するが、とくに第四章では、近代登山との精神的な連関についても考察を加えたい。

第一章 山岳観の変遷

1. 歴史的概観

まず、ヨーロッパにおいて人々が山をどのように捉え、山とどのように関わってきたかについて、歴史的に概観してみよう。

ギリシア、ローマの昔から、山は醜悪な世界であった。中世ヨーロッパにおいても、山は恐ろしい竜や魔物の住み家と考えられ、美の対象として考慮されることはなかった。山岳美に対する認識は、ファン・アイク（1370—1426）やデューラー（1471—1528）のような画家たちによって徐々に改められてゆく。しかし、人々が進んで山に入り込むには、中世的な観念が崩壊し、自由な精神や自然への愛が社会的に自覚されることが必要になる。

山岳風景に対する趣味や登山の気風が一般に広まってゆくのは、十八世紀の半ば過ぎのことだ。山岳風景の賛美という点では、まずなによりもルソー（1772—78）の貢献が大きく、その流れはゲーテ（1749—1832）から、さらには十九世紀のバイロン、ワーズワース、シェリーらに受け継がれる。イギリスの貴族的修学旅行であるグランド・ツアーによってアルプスの山岳や氷河の見物が盛んになったのも十八世紀後半のことだ。

ところでA・ランの言うように、山が美しいからといって、それですぐに山に登ろうとする人は少ないが、山岳美の発見と登山熱の高まりが一致したのは偶然ではない³⁾。近代登山は1786年のモン・ブラン初登頂によって始まるとされ、十九世紀半ばにはいわゆる「黄金時代」がおとずれる。世界最初の山岳会であるイギリスのアルパイン・クラブが創設されたのが1858年のことだ。それと並んで、1856年、ラスキンの『近代画家論』が出版され

るに及び、美学的な面からも近代的な山岳観が確立されるに至る。

以上の概観からもわかるように、ルソーの果たした役割は、山に対する中世的な観念による束縛から解放し、山を美的観賞の対象として認知するという、美意識の変革の点にかかわっているというのが通説である。C=E・アンジェルはいくぶんセンセーショナルな調子で、1761年（『新エロイズ』出版の年）に「山が発見された」⁴⁾と書く。またD・モルネも、『新エロイズ』の情感あふれる自然描写がまず人々に受け入れられたのであり、「山に対する趣味を生み出したおおもとはルソーしかいない」⁵⁾と確言している。山岳美の発見がまず風景画の分野で成し遂げられたように、ルソーの山岳描写も、なによりピクチャレスクなものとして受け入れられたことは、ある意味で当然とも言えるだろう。ケネス・クラークは近代の「事実の風景画」の基本条件として新しい空間感覚、すなわち科学的透視図法を挙げている⁶⁾が、『新エロイズ』におけるサン＝ブルーも、山岳風景に接する際、パースペクティヴには敏感になっている。山の眺望は垂直で一度に目を打つのに対し、平野の眺めは斜めに遠のいていくと述べ、さらには空気遠近法を思わせるような指摘も行っている。

(...) le charme augmente encore par la subtilité de l'air qui rend les couleurs plus vives, les traits plus marqués, rapproche tous les points de vue; les distances paraissant moindres que dans les plaines, où l'épaisseur de l'air couvre la terre d'un voile, l'horizon présente aux yeux plus d'objets qu'il semble n'en pouvoir contenir.⁷⁾

それでは次から、『新エロイズ』に描かれた遥かに眺める山の描写のありかたを確認しておくことにしよう。

2. 『新エロイズ』における山岳展望

『新エロイズ』(1761年出版)⁸⁾は山を背景にし、かつ舞台にした小説だ。そのことは「アルプス山麓に住む二人の恋人たちの手紙」という副題によって、すでに明示されている。『新エロイズ』は確かに作者の想像力によって作り出された作品であるが、物語の舞台をいかに設定するかについては、想像力と並んで、作者ルソーの現実の体験も大きく寄与している。この間の事情については、『告白』においてルソー自身が明らかにしているところだ。作中人物を住まわせるのにふさわしい爽やかな木立ちや感動的な景観を求めて、ルソーは旅先で出会った美しい風景を次々と検討するのだが、第一候補に上がったテッサリアは、

自分の目で見えていないという理由で不採用となる。この地もまた、ギリシア北部にあつて、東西南北をそれぞれオーサ山、ピンドス山脈、オトリス山、オリンポス山といった山々に囲まれた地域である。だが、あくまでも湖水にこだわるルソーは、結局ヴェヴェーを小説の舞台として定めることにした。その理由をルソーは次のように述べている。

Il me fallait cependant un lac (...). *Le contraste des positions*, la richesse et la variété des sites, la magnificence, la majesté de l'ensemble qui ravit les sens, émeut le cœur, *élève l'âme*, achevèrent de me déterminer, et j'établis à Vevey mes jeunes pupilles.⁹⁾

「地形の対象」とはレマン湖の水平の広がりと呼応して垂直にそびえ立つアルプスの山並みを意識したものであることは想像に難くない。ルソーが水を好んだのは確かだが¹⁰⁾、山をいっそう際立たせるためにこそ湖水を必要としたと解するのはうがち過ぎだろうか。少なくとも、「魂を高める」ためには湖水よりも山岳の景観の方がいっそうふさわしいと言えよう。

ルソーは1754年にボートでレマン湖一周の旅をおこなった。その際、「湖水の対岸の景色にうたれ、その鮮明で忘れがたい印象を、数年後に『新エロイズ』の中で描写した」と、『告白』第八巻の中で語っている¹¹⁾。ルソーに鮮烈な印象を与えた「湖の対岸」は、実際、『新エロイズ』第一部手紙26のメーユリや、第四部手紙17のヴォー地方（北岸）およびシャブレ地方（南岸）の山々の描写となって実現した。

Là, j [Saint-Preux]' expliquais à Julie toutes les parties du superbe horizon qui nous entourait. (...) Je lui faisais observer les redans des montagnes, dont les angles correspondants et parallèles forment dans l'espace qui les sépare un lit digne du fleuve qui le remplit.¹²⁾

Et au-dessous de nous cette immense plaine d'eau que le lac forme au sein des Alpes nous séparait des riches côtes du pays de Vaud, dont la cime du majestueux Jura couronnait le tableau.¹³⁾

A・フランソワは、このレマン湖周遊の旅が、ルソーの自然感情の形成に重要な役割を果たしたと主張しているが¹⁴⁾、そのことは、今、引用を引いてきた『新エロイズ』第四部手紙17における記述からもうかがうことができる。サン＝ブルーはジュリに自分たちを取

り巻いている壮麗な地平線のすべての地域を説明しようと試みる。ローヌ川の河口、青い水晶のような湖、アルプスとジュラの平行に積み重なった稜線、ヴォー側の豊かな岸辺、多くの町とおびただしい住民、青々として美しく飾り立てた丘といった多様な自然と人間の生活がிரりまじった光景が、「心を奪う一幅の絵 (un *tableau ravissant*)¹⁵⁾」をなしている。自然と人間の調和が、自由の甘美な光景とサン＝ブルーには映った。また、サン＝ブルーはさらに、アルプスの自然は「感じやすい魂にだけよろこばれ、他の人々には恐ろしく見えるような美しさに満ちた」ものでもあるとの評価を下している。

Ce lieu solitaire formait un réduit sauvage et désert, mais *plein de ces sortes de beautés qui ne plaisent qu'aux âmes sensibles, et paraissent horribles aux autres*. Un torrent formé par la fonte des neiges roulait à vingt pas de nous une eau bourbeuse, et charriait avec bruit du limon, du sable et des pierres. Derrière nous une chaîne de roches inaccessibles séparait l'esplanade où nous étions de cette partie des Alpes qu'on nomme les glacières [=glaciers], parce que d'énormes sommets de glaces qui s'accroissent incessamment les couvrent depuis le commencement du monde. Des forêts de noirs sapins nous ombrageaient tristement à droite. Un grand bois de chaînes était à gauche au delà du torrent.¹⁶⁾

これはまさに、山岳風景に対する美意識の変化を人々に強いる、ルソーのマニフェストと言えるだろう。新たな感性を要請する姿勢は、『新エロイズ』の別の箇所にも見られる。「ヴァレ地方は人に知られていませんが注目されてしかるべきであり、見る目を持った旅行者がいなかったために賞賛されていないだけだということに、私はもう気付いています。」¹⁷⁾ 雪溶けでできた奔流、氷河、陰気な黒樅の森、大きな樅の森といった自然物が繰り広げる壮大な景観に対する感受性を、ルソーはサン＝ブルーの口を借りて、高らかに歌い上げたのだった。

なかでも氷河の景観は、土地の人々にとってはともかく、当時はまだ目新しいものであった。氷河の先駆的研究を行った自然誌学者としてスイスのゴットリーブ・ジークムント・グルーナー (1717—78) を挙げるができるが、そのグルーナーの、学術的な記述と同時にスイスの自然の美しさをも描いた『スイスの氷の山の描写』がベルンで出版されたのが1760—62年で、『新エロイズ』とほぼ同時期にあたる。ただし、ケラリオによるそのフランス語訳がパリで出版されたのは1770年のことにすぎない。その後、1778年¹⁸⁾ に出版されたビュフォンの『自然の諸時期』が、やはり氷河について触れている。H=B・ドゥ・

ソシュールもボワ、タレーフル、ボソン等の氷河に関する記述を行った。蛇足ながら、自然科学の分野だけでなく、社会的な現象としても氷河は最新的话题を提供し、やがて氷河見物が観光の一つの目玉となる。1741年のイギリス人ウィリアム・ウィンダムを先駆として、メール・ドゥ・グラス氷河の見物は、十八世紀後半のグランド・ツアーの定版となった。

ベルナール・ギュイオンは、この第四部手紙17を『新エロイズ』中でもっとも美しいのみならず、フランス文学中でも屈指の名文として称えているが、こうしてめでたく発見された山の景観は、『新エロイズ』の反響の大きさにともなって、読者の感性に大きな変化をもたらした。山岳風景によってかきたてられた陶酔的な感情を体験するために、「ルソー詣で」¹⁹⁾が流行となる。人々は山を美の対象として眺めることを覚え、さらには、実際に登ってみようとするようにもなった。こうして「1761年以降、初めてフランス人の目がスイスアルプスに向かいだす」²⁰⁾のである。

ただし、いま挙げた山岳描写は、主にレマン湖上ならびに湖畔から眺望したもので、歩行を介した山岳風景の体験という私たちのテーマからはやや外れるものだ。『新エロイズ』に描かれたもう一つの山岳地帯、それは第一部手紙23に登場するシプロン峠付近のヴァレ地方であり、私たちの主要なテーマに沿ったこの箇所に関しては、第三章で詳しく検討することにする。

第二章 ルソーの歩行

山に登るには、当然自分の足で歩かなくてはならない。ところで、『孤独な散歩者の夢想』の著者ルソーほど、歩くことによってもたらされる身体的、精神的喜びを自覚し、かつ実践した人はいないのではないだろうか。『告白』第二巻において述べているように、ルソーは徒歩旅行と山をたいそう好んだ。この趣味は青年時代にアルプスのモン・スニ峠を越えてイタリアのトリノへ旅した時の経験によって決定づけられたものだが、これら二つの事柄にたいする強烈な嗜好を、互いに切り離して考えることは適切ではないように思われる。とくにルソーにとっての山の意味を問うときには、両者をつねに一体のものとして、楯の両面として、相補的にとらえていくことが不可欠であろう。歩行という軽度で持続的な身体の運動をつうじて風景を経験し、認識する行為を、山岳的自然観照の中心に据えたことは、ルソーの山岳観の大きな特色となっているのである。

そこでこの章では、第一に、歩く行為をルソーがどのようなものとしてとらえていたか、また、歩くことによって自然や風景の知覚・体験にどのような新しい地平が切り開かれて

いったかという点、第二に、歩く人ルソーがどのような性質の空間や環境を好んだかという点を、順に検討してみたい。

1. 歩行による知覚の組み替え

ルソーは存在の原点に思唯ではなく感覚をおいた。たとえば『エミール』の中でルソーは、「私たちにとって、存在するとは感じることだ。私たちの感性は、疑いもなく、知性より先に存在するのであって、私たちは観念よりも先に感情を持ったのだ」¹⁾と述べている。観念はすでに感覚の直接性を失っている。ルソーが目指したのは感じる主体の復権であり、思唯と感情の統一的な認識方法であった。

ところで、ルソーが思考や精神活動の基盤を、歩行という身体運動の中に見出だした点は注目すべきであろう。

La marche a quelque chose qui anime et avive mes idées: je ne puis presque penser quand je reste en place; il faut que mon corps soit en branle pour y mettre mon esprit.²⁾

この一節はそれ自体、「我思う、ゆえに我在り」というデカルト的な心身二元論に対するアンチテーゼであると同時に、ルソーの歩行観が端的に表れた部分として興味深い。歩くことによって身体が刻むゆったりとした一定のリズムが、ルソーにとっては思索を活性化し飛翔させる原動力となった。

Je ne puis méditer qu'en marchant; sitôt que je m'arrête je ne pense plus, et ma tête ne va qu'avec mes pieds.³⁾

だが、問題は足の動きだけではない。歩行という運動が媒介する外的世界の影響である。ここで言う歩行とはもちろん、部屋の中をぐるぐると歩き回ること、言い換えれば単調な行為の繰り返しによって外界からの刺激を遮断し、唯我的な世界に閉じ籠ることではない。ルソーが思索の源泉としたのは、あくまで戸外での散歩であり、さらには、あてのない放浪であった。思索する歩行者を多様な世界が取り巻いており、さまざまな刺激に身を任せながら風景を縫って進んでいく。これは単なる空間の物理的な移動には還元できない。ルソーのコギトは、身体という他者のみならず外的世界や風景といった他者によってもつねに活性化され続ける。コギトと外界とを仲介するのが歩行のリズムであるというべきだろう

うか。

ところで『孤独な散歩者の夢想』は、タイトルからして歩く人ルソーの本領を表しているが、《rêverie》という名詞のもとにある動詞《rêver》は、マルセル・レーモンも指摘しているように⁴⁾、語源的には「放浪する、あてもなくさまよう」という意味を含んでいた。ルソーが夢想を歩くことに近づけ、結び付けたのは、実に自然な回帰であるということもできるだろう。もちろんじっとしたまま夢想に耽ることも当然可能であるが、ルソーの夢想には、やはり散歩やそぞろ歩きが欠かせない。それは純粹に内発的な空想ではなく、身体の運動や外界からの刺激に触発されてはじめて翼をはばたかせることが可能になる、いわば「精神と肉体に同時に関係する (psychosomatique)」活動なのだ。外界と遮断されたバステューユの牢獄のような場所よりも、豊饒な自然に周囲を取り囲まれたサン・ピエール島でのほうが、「いっそう完全に、快く」夢想に耽ることができると、ルソー自身『孤独な散歩者の夢想』の中で述べている⁵⁾。その意味で、夢想を媒介としたルソーの自然との交流は、後のロマン派に多く見られるような、広大で崇高な景観を前にした自己陶酔的な瞑想——この場合は文字通り「ピクチャレスク」な風景の絵画性のみが問題となる——とは趣を異にする。例えば後述するロベラでの植物採集登山では、「野生のまま奥深く隠された場所」で植物を探しながら、巨木の生い茂る暗がりや切り立った岩壁の眺め、猛禽類の啼き声といった「周囲の強烈な印象に影響され」、ルソーはしらずしらずのうちに夢想に耽り始める。また、これも後述するように、『新エロイズ』第一部手紙 23 ではサン＝ブルーが山に登りながら夢想に耽ろうと試みているが、今度は「つねに思いがけない光景に接して」夢想からそらされる、といった具合だ。

このような心身の協働的営みである夢想によるルソーの自然体験のメカニズムをよく表したのものとして、有名なビエンヌ湖上での至福体験を挙げることができる⁶⁾。そこでは、寄せては返す波の響きと揺れ動く水面とがルソーの感覚をとらえ、外界の「一様な連続運動」が内面のそれへと置き替えられることにより、ルソーは甘美な夢想に引き入れられる。自分を取り巻く自然との一体感を感じ、存在そのものの充足を味わうためには、「周囲にある事物の協力が必要」なのだ。ルソーはこうも述べている。

Il n'y faut ni un repos absolu ni trop d'agitation, mais *un mouvement uniforme et modéré qui n'ait ni secousses ni intervalles*. Sans mouvement la vie n'est qu'une léthargie.⁷⁾

この「動揺や中断をともしない適度で一様な運動」に、魂の内部の運動が歩調を合わ

せることによって、自然は内面化されるのである。その際、軽度で持続的な歩行という身体運動は、この自然の内面化にうってつけの手段であると言えよう。散歩や夢想によって実現される、適度なりズムをともなった運動は、ルソーが最も好んだ存在様態であった。

ところで桑原武夫の言う「眺める山」と「歩き回る山」との一番の違いは何だろうか。それは文字通り、それぞれの山を知覚する器官の違いに由来するものであろう。前者の場合は目であり、後者の場合は象徴的な意味で足である。言いかえれば、前者は視覚を主体とした山の把握であり、後者は運動感覚と皮膚感覚を合わせた体性感覚、すなわち広い意味での「触覚」を主体とした山の把握である。

中村雄二郎『共通感覚論』によると、キリスト教的な考え方から、ヨーロッパの中世においては、もっとも鋭敏で洗練され、世界との豊かな接触をもたらす感覚は、聴覚であった。ところが、近代の初めに五感の序列に転倒が起こり、視覚が優位化する。「近代文明は、触覚と結び付いたかたちでの視覚優位の方向では発展せずに、むしろ触覚と切り離されたかたちでの視覚優位の方向で展開された。近代文明にあっては、ものや自然との間に距離がとられ、視覚が優位に立ってそれらを対象化する方向を歩んだのである。」⁹⁾つまり、近代文明を成り立たせている背景として、視覚に対する偏重と、その反動としての触覚の軽視があるということだ。ところが『道徳書簡』（第三の手紙）で述べているように、ルソーは人間の諸感覚の中で、真実の探求にもっとも役に立つ感覚として、視覚と同時に触覚をも重要視していた⁹⁾。のみならず、『エミール』では、錯覚に陥りやすい視覚を、直接的で確実な触覚に従属させるべきだとさえ主張している。「触覚がそのはたらきを人間の周囲に集中させるのと同じ程度に、視覚はそのはたらきを人間の外に広げる。そのため視覚は人をだましやすいものとなる。(……)視覚の器官を触覚の器官に従属させ、いわば、性急な視覚を鈍重な触覚の制限された歩みに合わせて抑制する必要がある。」¹⁰⁾視覚は錯覚をおこしやすい。錯覚とは、触覚による矯正をのがれた視覚の暴走によってもたらされる誤った判断だが、錯覚を自覚することは、触覚による直接体験に立ち戻ることには他ならない。同じ『エミール』によると、「触覚がなければ、漸進的な運動がなければ、どんなに鋭い目でも、わたしたちに空間の観念を与えることはできない」¹¹⁾という。ここでルソーが触覚を漸進的な運動と規定している点は注目に値するだろう。この場合の触覚は、「単に皮膚の接触感覚にとどまらない、広い意味での体性感覚の一つであり、それは同じく体性感覚に属する筋肉感覚や運動感覚と密接に結び付いて働く」¹²⁾ものである。ルソーにとって歩くことは、このような「漸進的な運動」と結び付いた触覚を視覚への従属から解放し、触覚が本来もっている外界との直接的な接触を回復することなのではないだろうか。「触覚は、すべての感覚のなかで、外部の物体がわたしたちの体にあたえる印象を最もよく教えてくれる

ものとして、最もひんぱんに使用され、わたしたちの自己保存に必要な知識をもっとも直接的に与えてくれるものとなっている。」¹³⁾ 歩行によって切り開かれる風景というものがあるとすれば、それは体性感覚によって統合された諸感覚を用い、風景を知覚しなおすことではあるまいか。ヨーロッパ・アルプスを代表する有名な山岳ガイドであるガストン・レビュファは、景観と歩行がまさに一体になったものとして自然の美をとらえ、歩くことのリズムによって風景を見、聞き、感じると証言している。

Ce pays, la Sainte-Baume, c'était des paysages et tout autant la marche; c'était les deux ensemble. Sans la marche qui nous mettait à son rythme et nous forçait à voir, à entendre, à sentir, il eût été moins beau.¹⁴⁾

言いかえれば、風景とは歩くことによって生み出されていくものなのだ。

自分が動けば空気も流れる。歩く人は空気の厚みを感じる。それまで額縁の中におさまっていた風景が、突然ざらざらとした抵抗感をともなって、歩行者の周囲を取り囲むのである。風や日射もふくめた大気の温度や湿度をはじめとして、歩く人は、いやがうえにも多種多様な外界の刺激に対して敏感にならざるをえない。「風景に確信を持つためにわれわれは触覚を利用する」と、小林享も指摘している。「人は一瞥のうちに素材や大気の素性を見抜く力を持つが、それをゆるぎないものとするためにさらに触感に働きかける。つまり、視覚的にそして仮想的にとらえた触れるという感覚を身体的現実へと引き込むのだ。(……) ひと、ものに触れ感じそして感動し、風景に酔いしれる。」¹⁵⁾

存在するとは感じることだと言うルソーは、触覚によって代表されるような「実感」もしくは「臨場感」を重んじていたと考えられる。自然や風景の「臨場感」を味わいながら空間を移動するのに歩行ほど適した手段はない。あれほど旅を枕に人生を送ったルソーも、馬車での旅を、徒歩での旅ほど好まなかったのは、馬車に座ったままでは視覚的存在から解放されず、車窓に流れる風景が、額縁の中の風景と同じように臨場感の乏しいものでしかなかったからではないだろうか。

2. さすらい歩きの空間の性質

さすらい歩くことによってルソーは、文字通り地に足の付いた自分という存在を回復する。トリノへの旅行は、そんな自分自身の存在の重みを再発見する旅でもあった。

Jamais je n'ai tant pensé, tant existé, tant vécu, tant été moi, si j'ose ainsi dire,

que dans ceux [mes voyages] que j'ai faits seul et à pied.¹⁶⁾

《tant》という副詞の繰り返しによって強調されているもの、それは、社会の諸々の束縛から解放された気ままな徒歩旅行を通じての自己の存在感の拡大であろう。この点からも見て取れるように、ルソーの歩行には非日常的な、ある意味で反社会的な性格が付与されていることを忘れてはならない。この引用の後でルソーは次のように書いている。

La vue de la campagne, la succession des aspects agréables, le grand air, le grand appétit, la bonne santé que je gagne en marchant, la liberté du cabaret, l'éloignement de tout ce qui me fait sentir ma dépendance, de tout ce qui me rappelle à ma situation, tout cela dégage mon âme, me donne une plus grande audace de penser, *me jette en quelque sorte dans l'immensité des êtres* pour les combiner, les choisir, me les approprier à mon gré sans gêne et sans crainte. *Je dispose en maître de la nature entière.*¹⁷⁾

徒歩旅行は単に社会からの空間的な脱出であるだけでなく——山は当時においても無法者の世界であった——、すでに歩行そのものが、社会の歯車として制約を余儀なくさせられる個人の存在を全的に発露させ得る契機となり、自由と解放をもたらすのではないだろうか。

ボルノウは、自己目的としてのさすらい歩きは現代文化批判の成果であり、ロマン主義がこのさすらい歩きを発見した後、二十世紀のワンダーフォーゲル運動によって生活様式にまで発展させられたと指摘している¹⁸⁾。文明や社会のあり方を根本から批判し、かつロマン主義の先駆ともなったルソーが放浪の達人であったことは、ボルノウの主張を裏付ける根拠となり得るものだ。

さすらい歩く人は自然な空間を欲する。さすらい歩く人は大きな道を敬遠し、「自分をより深く風景の内面へと導き入れる小道を優先的に選ぶ。」¹⁹⁾ それは例えば自由で開放的な森の中の小道であろう。『新エロイズ』第四部手紙11の、いわゆるエリゼのエピソードには、そのようなさすらい歩きに適した散歩道が描かれている。それは家のすぐそばにありながら、自然に生い茂っている樹木に覆われて、一見したところでは入り口さえもどこにあるのかわからない。エリゼの散歩道に初めて連れてこられたサン＝ブルーは、まず「心地よい清涼感につつまれる。」その清涼感は、もちろん皮膚感覚にもとづくものであるが、サン＝ブルー自身の分析によると、「暗い木陰、鮮やかな緑、点在する花々、水のせせらぎ、

鳥のさえざり」といった、視覚、聴覚によって知覚された外界の刺激が、「感覚と同時に想像にうったえかけ」ることによってもたらされた清涼感である。エリゼの第一印象をサン＝ブルーは次のように表現している。

Mais en même temps je crus voir *le lieu le plus sauvage, le plus solitaire de la nature*, et il me semblait d'être le premier mortel qui jamais eût pénétré dans ce désert.²⁰⁾

最上級におかれた形容詞はサン＝ブルーの新鮮な驚きを表すものであろう。歩く人にとって、自然はつねに新しいとも言えるのだ。だが、エリゼを歩き回る道すがら、サン＝ブルーはジュリとヴォルマルから、この散歩道がジュリの指揮によって人為的に作られたものであり、しかも人の手が加えられた跡を徹底的に隠蔽することによって、自然らしく見せかけてあるのだということを知らされる。ジュリによると、この散歩道の基本的な構成原理は不規則な曲線にあるという。このエピソードは、一種の庭園論として研究者たちに何度となく取り上げられてきた箇所だ。しかし、サン＝ブルーはジュリとヴォルマルによるエリゼの「庭園」としての種明かしにもかかわらず、あくまで「散歩道」としてさまよい歩き、「考える努力を放棄して」その風景に溶け込もうとする。

Plus je parcourais cet agréable asile, plus je sentais augmenter la sensation délicieuse que j'avais éprouvée en y entrant. Cependant la curiosité me tenait en haleine. J'étais plus empressé de voir les objets que d'examiner leurs impressions, et j'aimais à me livrer à cette charmante contemplation sans prendre la peine de penser.²¹⁾

庭は自然を社会の中に取り込もうとする試みであり、さすらい歩きの小道は社会の束縛からの解放と自然への帰還を指向する。自然とは、人間を取り巻く環境として自然だけとは限らない。人間の中にも欲望や情念といった、内なる自然が秘められている。かつて愛し合ったジュリとサン＝ブルーが口付けを交わした木立ちを、夫婦となったジュリとヴォルマルは長い歳月をかけ、庭として徳の原理が支配する共同体に帰順させようと努力してきた。エリゼが持つその裏の意味を、放浪者サン＝ブルーはなかなか認めようとしない。この小説において、歩く人というサン＝ブルーの属性は、きわめて象徴的だ。定住を拒否し、世界各地をあてもなく彷徨うことにより、サン＝ブルーは社会的な道德を越えた情念の炎に身を焦がすのである。

さすらい歩きは外的自然への帰還であると同時に、人間の内的自然、ボルノウの言葉を借りて言えば、「生の根源」への帰還でもある。ボルノウは、母なる大地との触れ合いの中で新しい力をつねに獲得するギリシア神話のアンテウスにたとえながら、人間はさすらい歩くことで若返る、と主張している²²⁾。この若返りは、歩く人自身の問題にとどまらないだろう。生き生きとした根源へと帰還することによって、歩く人を取り巻く自然に対しても、新しい関係を獲得するのだ。

山の中を歩き回る時も、やはり同じように、自然はまったく新しい世界として知覚される。ヴァレ山地での大気浴により、心身共に浄化されたサン＝ブルーは熱っぽく次のように語っている。

Imaginez la variété, la grandeur, la beauté de mille étonnants spectacles; le plaisir de ne voir autour de soi que *des objets tout nouveaux*, des oiseaux étranges, des plantes bizarres et inconnues, d'observer *en quelque sorte une autre nature*, et de *se trouver dans un nouveau monde*.²³⁾

これは自然の目新しさだけではない。「新しい世界の中にいる喜び」と表現しているように、自然との関係そのものが新鮮なのだと言えるだろう。

第三章 ルソーの山岳逍遙

1. 垂直指向

ルソーの山歩きは自己目的性を第一の特徴としている。何にもとらわれることのない放浪の生活に、変化に富んだ山の自然物は格好の彩りとなる。さすらい歩くものは大きな道を避け、静寂で自然の豊かな小道を選ぶとボルノウは指摘したが、ルソーの場合はそれに加えて山の中の道を選ぶと言うべきかもしれない。

J'aime à marcher à mon aise, et m'arrêter quand il me plaît. La vie ambulante est celle qu'il me faut. (...) *Jamais pays de plaine, quelque beau qu'il fût, ne parut tel à mes yeux*. Il me faut des torrents, des rochers, des sapins, des bois noirs, des montagnes, des chemins raboteux à monter et à descendre, des précipices à mes côtés qui me fassent bien peur.¹⁾

気の向くままに歩くというだけではルソーには不十分であって、特に平地では満足できない。不規則で多様な景観を縫って進む山道こそ、歩く人ルソーの好みに合った空間なのである。

そもそもルソーには垂直方向への指向性があるようだ。山を見上げる時の垂直な眺望の与える強烈なインパクトについて、サン＝ブルーは次のように報告している。

La perspective des monts, étant verticale, frappe les yeux tout à la fois et bien plus puissamment que celle des plaines, qui ne se voit qu'obliquement, en fuyant, et dont chaque objet vous en cache un autre.²⁾

後景が前景の背後に隠れてどんどん遠ざかっていく水平の眺めよりも、一度に目の中に飛び込んでくる垂直の眺めのほうが、より感動的だというのである。

垂直方向をつねに指向し続ける水の動きとして滝が挙げられるが、この山岳にはつきものの滝の景観もルソーが好んだものの一つだ。リヨンからシャンベリーに向かう途中にある滝は、落ち口が迫り出しているために、十分注意をすれば「滝と岩のあいだを濡れずに通る」こともできるのだが、この滝をルソーは「今までに見たもっとも美しい滝」と形容しているし、トラヴェールの谷間の自然や風俗を事細かに報告したリュクサンブール元帥宛ての手紙（1763年1月28日付け）でも、「遠くからも聞こえる音を立てて落ちる素晴らしい滝」と、その滝壺のかたわらに口を開けている洞窟が描写されている³⁾。ヴァレ地方の山地を巡るサン＝ブルーも、「高いごうごうたる滝の厚い水しぶきを浴びる」ことを忘れていない⁴⁾。

『新エロイーズ』のヴァレ地方からの手紙の中で、サン＝ブルーはペトラルカのソネットを引用しているが⁵⁾、この事実も興味深いものだ。ペトラルカは1336年4月26日にアヴィニヨンの北東、プロヴァンス・アルプスの前山であるヴァントゥー山（1,912 m）への登山を行ったことでも有名だ。このときの体験を綴ったディオニジ宛ての手紙はいわゆる「ヴァントゥー山登攀記」として山岳文学の黎明期を飾っている。ただし、河村民部の『山頂に向かう想像力』によると、ヴァントゥー登山がペトラルカにもたらした意義は、山頂から見わたす雄大な自然の光景から受ける感銘よりも、精神＝魂の山登り、すなわち神を目指しての魂の上昇を会得した点にあるという⁶⁾。すなわち、「肉体を拒否し精神的上昇を目指す」⁷⁾媒体として山がとらえられているのに対し、ルソーの場合は、後述するが、同じ魂の浄化でもペトラルカほどの宗教色はなく⁸⁾、身体的存在と強く結び付いたものだ。だがいずれにせよ、これは精神的な意味での垂直指向と呼べるだろう。

ルソーの垂直指向が端的に現れるのは、何と言っても絶壁から足元のすっぱりと切れ落ちた空間をのぞき込む恐怖とスリルを楽しむという趣味においてである。レ・ゼシェル(ルソーはパ・ドゥ・レシェルと取り違えている。)に近いシャイユの絶壁を通りがかったときの経験を、ルソーは『告白』の中で次のように描いている。

Non loin d'une montagne coupée qu'on appelle le Pas de l'Echelle, au-dessous du grand chemin taillé dans le roc, à l'endroit appelé Chailles, court et bouillonne dans des gouffres affreux une petite rivière qui paraît avoir mis à les creuser des milliers de siècles. On a bordé le chemin d'un parapet pour prévenir les malheurs: cela faisait que je pouvais contempler au fond et gagner des vertiges tout à mon aise; car ce qu'il y a de plaisant dans mon goût pour les lieux escarpés est qu'ils me font tourner la tête, et j'aime beaucoup ce tournoiement pourvu que je sois en sûreté.⁹⁾

ルソーが高所を好むのは、ひとつには眩暈の感覚が好きだからだ。カイヨワは『遊びと人間』の中で、登山をイリンクスすなわち眩暈の追及にもとづく遊びに分類している。カイヨワの定義によるとイリンクスに属する遊びは、「一時的に知覚の安定を破壊し、明晰であるはずの意識をいわば官能的なパニック状態におとしいれようとするもの」だとされる。垂直方向の眺めは、たとえそれが見上げる場合であっても、視覚によってとらえた空間を身体的現実としてとらえ直すことによって、知覚に何らかの不安定をもたらし、それまで安住していた自明の世界から引きずり出して、いわば混沌とした世界に直面させる。ここでは惰性的な知覚は役に立たない。視覚はとくにそうだ。理知的な把握をしがちなだけに、いっそう錯覚も起こしやすい。『道徳書簡』(第三の手紙)の中でルソーも「視覚がもっとも多くの情報ともっとも多くを、われわれに伝える。」「視覚がかくもしばしばわれわれを欺き、触覚のみがそれを訂正する。」と述べていた¹⁰⁾。人は目の眩むような高所では、下を見ないように、あるいは文字通り目をつぶって、なんとか安全なところまでたどり着こうとする。官能がパニック状態に陥ってしまったら、手探りでひとつひとつ「実感」しながら確実な世界にしがみつくと他ないのである。

だがこのような垂直指向にもかかわらず、ルソーはピーク・ハントには興味がなかった。ルソーが高山に関心がなかったという指摘も正当である。ルソーの生涯での最高到達点は二千メートルを多少うわまわったにすぎない。しかし、だからといってルソーの登山の現実感を否定し、ルソーの描く山をイデオロギーだときえ言い切ってしまうのは、いささか性急に過ぎるくらいがなきにしもあらずだ。通俗的ではあるが、山高さがゆえに尊からず、

ということもある。高峰の頂きを目指さなかったからといって、ルソーの濃密な山岳体験が薄れるわけではないだろう。アルプスの峠越えにしても、今と昔とではだいぶ趣が異なるものだ。ルソーの当時はまだ、冒険的な要素をかなり残していたと言える。それでは次から、ルソーの経験したアルプスの峠越えについて検討してみることにしよう。

2. アルプスの峠越え

峠とは人間の生活と山の自然とがもっとも近くまで接近する場所のひとつである。道路が整備され、登山や観光の発達によって、容易に高山へ分け入ることのできるようになった今でこそ、峠は文明社会の側に取り込まれ、もはや「山」とは言えなくなってしまったかもしれないが、十八世紀ごろのアルプスの峠と言えば、まだまだ通常の生活圏からは遠く離れ、自然（＝社会の外部）の奥深くに隔絶した秘境という色合いが濃かった。

歴史的にみると、アルプス越えでまず思い出されるのは、紀元前218年、カルタゴの将ハンニバルの行軍であり、1800年のナポレオンとオーストリア軍とのマレンゴの戦いであろう。ハンニバルの昔は当然としても、十九世紀のナポレオンの時代にあっても、シンプロン峠(2,005 m)を越えようとした部隊は辛酸を極めた。それくらい、アルプスの峠は自然の猛威が人間を圧倒する領域だったのだ。そんなアルプスの峠越えを、ルソーは十八世紀の前半に三度経験している。一度目と二度目はモン・スニ峠(2,084 m)、三度目はシンプロン峠だ。

ルソーよりも半世紀以上前にシンプロン峠を越えたジョン・イーヴリンは、「ひじょうに険しく、ごつごつして危険な山道を通り……奇怪な恐ろしい岩山や、熊と狼と野性の山羊しか住まぬような松の森林地帯を過ぎて……天にも届くほどの岩と山に地平線をさえぎられながら」進んだと『日記』に書いている¹¹⁾。ニコルソンの『暗い山と栄光の山』によると、このような記述は因習的なステレオタイプであるという。すなわちルクレティウスが山を世界の荒れ地と呼び、バーネットが醜い地球のこぶと呼んだように、イーヴリンにとっても山は「恍惚」や「歓喜」をもたらす魅力的な場所ではさらさらなく、「あたかもロンバルディアの平原をきれいに整えるために、自然が大地の塵芥をアルプスに掃きためた」ようなものだった¹²⁾。

ルソーに遅れること十数年、1739年にトマス・グレイと連れだってモン・スニ峠を越えたホレス・ウォルポールですら、リチャード・ウェストに宛ててこう書いている。「正直言ってモンズニーは、山に許されている恐ろしさの限界を越えている。そしてその恐怖には醜い危険が伴っているのだから、美しさを考えるひまなどないのだよ。」¹³⁾

モン・スニ峠はアルプスを横断する幹線ルートのひとつであり、イタリアのトリノとフ

ランスのグルノーブルもしくはシャンベリーを結ぶこの峠は、南西側にはバール・デ・ゼクランやラ・メイジュをはじめとするゼクラン山群がそびえ、北東側はヴァノワーズ山群に連なる。西部アルプスのまっただ中に位置した由緒ある峠だ。

ルソーは16歳のときと17歳のとき、そのモン・スニ峠を越えてトリノまで往復している。行きは1728年3月24日にアヌシーを発ち、4月12日にトリノへ到着した。帰りはその翌年の6月ごろ、トリノからシャンベリーを目指している。峠越えの旅についてのルソーの感想は、いま挙げたイギリス人たちのものとはまったくかけ離れたものだ。

Je ne me souviens pas d'avoir eu dans tout le cours de ma vie d'intervalle plus parfaitement exempt de soucis et de peine, que celui des sept ou huit jours que nous mîmes à ce voyage. (...) *Ce souvenir m'a laissé le goût le plus vif pour tout ce qui s'y rapporte, surtout pour les montagnes et pour les voyages pédestres.*¹⁴⁾

ルソー自身が長い散歩にたとえたこのモン・スニ峠越えの印象から、以来ルソーは、山と徒歩旅行を愛好してやまなくなる。当時のアルプス山中における危険は、自然がもたらすものだけとは限らない。山賊や無法者の類も数多く跋扈していた。それを「気苦勞のない長い散歩」とまで言い切るのは、恐れを知らない若さゆえであろうか。あるいは、自由、自主の精神からくる、失うものは何もないという解放感が恐怖を圧倒したのか、「予想以上に愉快だった」¹⁵⁾ というモン・スニ越えは、ルソーの山に対する憧憬や親近感を決定的なものにすると同時に、青春時代の充実した存在体験、自然体験として、ルソーの心に刻み込まれた。

Je m'acheminai gaiement avec mon dévot guide et sa sémillante compagne. Nul accident ne troubla mon voyage; j'étais dans la plus heureuse situation de corps et d'esprit où j'aie été de mes jours. Jeune, vigoureux, plein de santé, de sécurité, de confiance en moi et aux autres, j'étais dans ce court mais précieux moment de la vie où sa plénitude expansive étend pour ainsi dire notre être par toutes nos sensations, et *embellit à nos yeux la nature entière du charme de notre existence.*¹⁶⁾

この時のルソーは、荒涼として威圧的な山岳のパノラマを前にして、恐怖におびえる人間ではなく、いわば自然と等身大になって、自分自身の若くて充実した生命的存在を自然の全体に重ね合わせている。このような感覚は、単なる物理的な移動の手段として歩行を

用いる者にはとうてい理解できないものであろう。一步づつ足を踏み出すリズムによって自然の鼓動と一致する、ルソーならではの自然体験がここにはある。

翌1729年の6月ごろ、トリノからシャンベリーへと戻って来る際にも、ルソーはモン・スニ越えを何ら苦にしていない。往路の記憶を「うっとりと思ひ浮かべ」、「義務も束縛もなく、好きなときに歩き、好きなときに立ち止まれるなら」、社会的な出世などどうでもいいとさえ思っている¹⁷⁾。ルソーにとって、「アルプス越えの楽しみ」は、「放浪生活の幸福を享受する」ことでもあった¹⁸⁾。

また、1744年の秋（8月末か9月初）にはヴェネチアからパリへ向かう途中に、今度は同じくアルプスの要衝であるシンプロン峠を越えてジュネーヴに至っている。ナポレオンのアルプス越えでも有名なこの峠は、北にユング・フラウを望み、南にはモンテ・ローザが聳えている。だが、シンプロン峠越えに関する記述は「……ベルガモ、コモからドモ・ドッソーラを経て、シンプロン峠を越えた」¹⁹⁾と、じつに素っ気ない。『告白』執筆の頃、迫害妄想にとらわれていたルソーは、スパイに付きまといられているためこの時の旅の模様を落ち着いて詳しく描写する余裕がない、と弁解している²⁰⁾。

しかし幸いなことに、この時の体験は『新エロイズ』第一巻手紙23に結晶した。季節も深まり、雪に追い立てられるようにサン＝ブルーがヴァレの山地をわずか一週間で巡るという設定は、「一刻も早くパリに向かう」ため急いで秋のシンプロン峠を越えたときの状況と重なり合う。

Je gravissais lentement et à pied des sentiers assez rudes, conduit par un homme que j'avais pris pour être mon guide et dans lequel, durant toute la route, j'ai trouvé plutôt un ami qu'un mercenaire. *Je voulais rêver, et j'en étais toujours détourné par quelque spectacle inattendu.* Tantôt d'immenses roches pendaient en ruines au-dessus de ma tête. Tantôt de hautes et bruyantes cascades m'inondaient de leur épais brouillard. Tantôt un torrent éternel ouvrait à mes côtés un abîme dont les yeux n'osaient sonder la profondeur. Quelquefois, je me perdais dans l'obscurité d'un bois touffu. Quelquefois, en sortant d'un gouffre, une agréable prairie réjouissait tout à coup mes regards.²¹⁾

歩行が夢を喚起することについてはすでに見たとおりだが、ここでもサン＝ブルーは「夢にひたりたいと思ひ」ながら、次々と現れる「思ひがけない光景によって夢からそ

らされる。頭上を圧する巨大な岩，水しぶきをあびせかける大瀑布，切り立った崖から急流をのぞき込む恐怖。まさに実際に歩かなくては味わえない臨場感であり，《tantôt》，《quelquefois》といった副詞の繰り返しが，一足ごとに違った様相を見せる自然の変化に対する新鮮な驚きを表していると言えよう。

中には視覚に重きをおいた描写もある。

Ajoutez à tout cela *les illusions de l'optique*, les pointes des monts différemment éclairées, le clair-obscur du soleil et des ombres, et tous les accidents de lumière qui en résultaient le matin et le soir; vous aurez quelque idée des scènes continuelles qui ne cessèrent d'attirer mon admiration, et qui semblaient m'être offertes en un vrai théâtre.²²⁾

だが、「さまざまな目の錯覚」と言っているように，サン＝ブルーの目に映る光景は，純粹な座標空間における自明の透視図とはひと味違っている。光と影の交錯によって彫琢された山岳の景観は，もっとも欺かれやすい感覚としての視覚の欠点をもてあそんでいるかのようだ。

しかし，サン＝ブルーをもっとも感動させたのは，多様な自然が繰り広げるスペクタクルそれ自体ではない。「自己の内によみがえる平穏な気分」にこそサン＝ブルーは心を打たれ，その気分によりゆったりとこころゆくまで浸るのである。

J'arrivai ce jour-là sur des montagnes les moins élevées, et, parcourant ensuite leurs inégalités, sur celles des plus hautes qui étaient à ma portée. Après m'être promené dans les nuages, j'atteignais un séjour plus serein, d'où l'on voit dans la saison le tonnerre et l'orage se former au-dessous de soi. (...) *Ce fut là que je démêlai sensiblement dans la pureté de l'air où je me trouvais la véritable cause du changement de mon humeur, et du retour de cette paix intérieure que j'avais perdue depuis si longtemps.* En effet, c'est une impression générale qu'éprouvent tous les hommes, quoiqu'ils ne l'observent pas tous, que *sur les hautes montagnes, où l'air est pur et subtil, on se sent plus de facilité dans la respiration, plus de légèreté dans le corps, plus de sérénité dans l'esprit*; les plaisirs y sont moins ardents, les passions plus modérées. Les méditations y prennent je ne sais quel caractère grand et sublime, proportionné aux objets qui nous frappent, je ne sais quelle volupté tranquille qui n'a rien d'âcre et

de sensuel. *Il semble qu'en s'élevant au-dessus du séjour des hommes, on y laisse tous les sentiments bas et terrestres, et qu'à mesure qu'on approche des régions éthérées, l'âme contracte quelque chose de leur inaltérable pureté.*²³⁾

サン＝プルーは内心の平和の回復の真の原因を、高山の清浄で微細な空気に求めている。この空気が呼吸を楽にし、体を軽くし、精神を明朗にする、というのだ。それゆえ、山上での瞑想は外界の光景と釣り合った、偉大で崇高な正確を帯びる。いわば、魂が浄化されたのだ。

Je suis surpris que des bains de l'air salubre et bienfaisant des montagnes ne soient pas un des grands remèdes de la médecine et de la morale.²⁴⁾

サン＝プルーは、人間の肉体にも精神にも効能十分な山の空気にひたることが、医学的にも倫理的にも重要な療法となり得ることを力説している。

サン＝プルーが驚きと熱烈な調子を持って報告したこの大気の問題は、第二章ですでに触れた、歩行による感覚の「触覚化」を裏付けるもののひとつになり得るだろう。私たちがとかく視覚に頼りがちな日常の生活から、歩くことによってまず解放されるのは触覚であり、とりわけ肌で感じる空気の存在感に改めて新鮮な驚きを覚えるのではないだろうか。ルソーが山に登って見出だしたのは、目に映る景色の美しさだけではない。大気の厚みや重さを感じ、全身の知覚によって風景の崇高さに「触れる」感動もあった。D・モルネは、「ハラーもアルプスを描いたが、登山の喜びを最初に表現したのはルソーである」²⁵⁾と指摘しているが、登山の喜びとは、まさに風景や自然を実感し、酔いしれる喜びなのではないだろうか。

第四章 ルソーの科学的登山

1. 科学と登山

ヨーロッパにおける近代登山の歴史は、1786年8月8日18時23分のモン・ブラン初登頂に始まると言われている。もちろんシャモニの医師ミシェル＝ガブリエル・パカールと、ガイドとして名乗りを上げた土地の水晶採りジャック・バルマによって成し遂げられたこの快挙が登山史にもたらした意味はあくまで象徴的なものであって、それ以前にも十八世紀の中頃から、少数ながら先駆者たちの手によって、アルプスの高峰は徐々に開拓が進め

られていた。

例えば、1744年にはエンゲルベルグの4人の農夫が3,239mのテート・ルースに登り、ルソーとも親交のあったドゥ・リュック兄弟は、学術調査の目的で、1770年にビュエ(3,109m)の登頂に成功している。1778年にはジャン・ジョゼフ・ベックが、冬でも花の咲いているという幸福の谷を求めてリスヨッホ(4,153m)に到達した。更に1779年にはサン・ベルナルの僧侶ムリスがペラン(3,734m)の登頂に成功し、ダン・デュ・ミディ(3,257m)の一峰はエギーユ・デュ・グーテおよびドーム・デュ・グーテと同年の1784年に、ヴァル・ディリエの司祭クレマンによって初登頂されている。この時代の登山を一言で要約するとすれば、ベネディクト会の僧侶プラシドゥス・ア・スペシアに代表されるような宗教家による登山が盛んな時期であったと言えるだろう。

しかしこれらアルプス諸峰における挑戦は、影響力の大きさという点で、モン・ブラン登頂には遠く及ばなかった。A・ランは「[モン・ブラン] 登攀成功のニュースが人びとにあたえた印象は、1969年7月の月面初着陸が世間を驚嘆させたのとかなり似かよっていた」¹⁾とさえ述べているほどだ。このモン・ブラン初登頂を機に、山を恐れる時代は去って、いわゆるスポーツ登山の「輝ける時」²⁾が始まる。モン・ブラン山群はフランス、イタリア、スイスの国境域を覆い、四千メートル峰を25座も数える山塊だ。その盟主モン・ブランは標高4,807m、かつてはモン・モーディ(呪われた山)という名でふもとの住民たちに恐れられていた山である。この山に登ることを真面目に考えた最初の人間はH・B・ドゥ・ソシュールだった。そして彼は、モン・ブランの登頂に成功した者には、報酬として賞金を与える旨、シャモニの三つの教区に公示する。それから二十数年後、前述のパカールとバルマが、見事に偉業を成し遂げたわけであるが、それでは、なぜ、このモン・ブラン初登頂が、かくもセンセーショナルな出来事となり得たのだろうか。

まず、征服されたのがヨーロッパ第一の高峰であったことからくる象徴的な意味付けは、確かに考慮に値する。ただ、当時はまだ山の標高が正確には測量されていなかった。例えば、1755年にはミシュリ・デュ・クレストがサン・ゴタール山塊の標高を5,363mと計算している。それに対してモン・ブランの標高は、一般には4,777mとされていた。パカールをこの山に駆り立てた第一の目的は、その標高がより高いものであることを証明することにあったという。しかし、パカールが携えていった高度計は、故障のため実際よりも高い高度を示し、モン・ブラン山頂における計測では、5,039mを記録した。その後パカールは計器の不調に気付き、計算修正の結果、4,738mという標高をはじき出している。ちなみに、サン・ゴタール山塊の標高については、ソシュールが『アルプス旅行記』第四巻(1796年)において、3,510m(グレチャーベルク)に訂正している。

その次に考えられるのは、逆説的ながら、賞金が懸けられていたがゆえに、無償の登山が可能になったということだ。それまでのヨーロッパにおける登山のあり方を概観してみると、圧倒的に多数を占めるのが、宗教的な動機に基づいた登山であり、その他、軍事的な理由で登られる例もあったが、山に登ること自体を目的とした登山は極めて希であったと言える。懸賞金目当てというのは、一見不純な動機ではあるが、賞金は行為の代償として付いてくるものであって、登山行為自体を拘束するものではない。逆に賞金が懸けられることによって、バルマのような一介の水晶採りが、「呪われた山」にのこのこ出かけて行く口実ができたのだ。山登りは一種の賭となり、ゲームとなる。その結果としての「呪われた山」の征服は、中世以来、悪魔や竜の住家とされてきたアルプスから、神秘性や迷信性を振り払うのに十分なインパクトを持っていたと考えられる。

さらに、科学的な精神による裏付けも、大きな意味を持っていた。桑原武夫は近代アルピニズムの起源となり、指導精神となったものとして、カトリシズムに基づく山の神秘性、迷信性の解消とともに、近代自然科学を挙げている³⁾。そもそも、近代登山史の幕開けとなったモン・ブラン初登頂を企てたソシュールは、地質学と物理学を専門とする学者であり、モン・ブラン初登頂という大事業の影にも、「観察と実験」⁴⁾という科学的な口実があった。パカールとバルマに続いてソシュールがモン・ブラン第三登を成し遂げたときも、山上での学術的調査と観察に余念がなかった。パカールにしても、すでに述べたように、標高の測定が第一の目的であったし、頂上付近では岩石の調査、収集を行っている。もっとも、アンジェルはソシュールの山岳描写の中に「山と格闘し、困難を乗り越える快楽、頂上に立つ喜び」の表現を認め、ソシュールが厳格な科学者から、「徐々にアルピニストに変わっていった」とも評している⁵⁾。

いずれにせよ、科学的動機による山登りは、古くは十六世紀のコンラート・ゲスナーとジョシアス・ジムラーに端を発し、十九世紀に全盛となる登山スタイルだ。フーギ、アガシ、フォーブズ、チンダルといった人々が、その主要な人物だが、とくに氷河学者の活躍が目立つのは当然といえよう。自然科学の合理的精神は、山から神秘性をはぎ取るのにきわめて有効だった。ルソーの山登りもまた、多分にこの科学的精神に負うところが大きい。後に詳しく見ていくが、ルソーは植物学に造詣が深く、しばしば植物採集のため、ジュラをはじめとする山々に出かけている。

こうして山は、中世的な迷信の世界から抜け出し、自然研究の対象となる「物質」へと大きく変貌をとげたが、それだけでは登山が一般的な流行となるには不十分だった。ここで、登山家とは言えないまでも、山に興味を持ち、山の見方に新風を吹き込んだ一群の人々の力が必要になってくる。それは例えば、ハラー、バーネット、アディソン、グレイといっ

た人々だ。その中でも、理屈では説明できない意識感情に訴え、山岳の景観をある種の美としてとらえることを人々の間に広める上で、大きな原動力となったのが、すでに見たように、他ならぬルソーであり、とりわけ『新エロイーズ』であった。

1761年にパリで出版されたルソーの書簡体恋愛小説『新エロイーズ』は、当時としては空前の売れ行きをみせ、十八世紀最大のベストセラーとなった。その理由のひとつに、みずみずしい自然描写があったことは否定できないだろう。それまで、小説といえば宮廷やサロンといった狭い貴族社会の中での恋愛や人間観察を描いたものが大半で、フランス文学においては特に、外的自然の描写が文学作品の中に取り入れられることは、ごくまれであった。ところが『新エロイーズ』によって田園生活の魅力や山岳風景の美しさに、人々は改めて目を開かされ、次第に田園趣味や山岳趣味が広く社会に浸透していくようになる。確かに外的自然に対する興味を積極的に表現したのは、ルソーがまったくの最初という訳ではないが、社会的な影響力の大きさという点では、ルソーの右に出るものはなかったようだ。

登山に関しても同じことが言える。ヨーロッパにおける登山の歴史を書こうとすれば、ルソーを抜きにするわけにはいかない。モルネはルソーを登山の喜びを最初に表現した人と評した。山岳美の発見は登山の十分条件にはなり得ないが、最低でも必要条件にはなり得るものだ。そして両者が、ルソーのような一人の人間によって実現されたとしても不思議はないだろう。ただし、ソシュールがルソーの影響を受けてモン・ブランを目指したと即断するについては、多少疑問が残る⁶⁾。モン・ブランの初登頂は確かに1786年だが、H=B・ドゥ・ソシュールが懸賞を発表し、人々の関心をモン・ブランに向けさせたのは1760年にまで遡る。『新エロイーズ』がパリで出版されたのが1761年1月の終わりだから、そもそもの発端において、ソシュールはルソーの、少なくとも『新エロイーズ』の影響からは完全に自由だった。アンジェルも「ソシュールはルソーをあまり好まなかった」⁷⁾と指摘している。確かに、ソシュールの山に対する興味は純粋に科学的なもので、いわゆる「もの書き」となることを意識的に避けようとさえしていた⁸⁾。しかしその後は、賞金など眼中に無く、身銭を切ってもモン・ブランに登ろうと執念を燃やすマルク・テオドール・ブーリ(1739—1819)のような人物も登場してくる。最初、自分ではモン・ブランに登ろうとは思わなかったソシュールが、自分でも頂上を目指してみようと考えようになったのは、ルソーとビュフォンを崇拜し、モン・ブランに魅せられて毎年のようにアルプス地方に通い、高山や氷河、渓谷の魅力を情緒的な文章で、あるいは絵画で表現したこのブーリの「抒情性」のおかげであったという⁹⁾。その意味ではソシュールも、間接的にはルソーの影響と無縁ではなかったと言えるかもしれない。パリで爆発的な売れ行きを見せた『新エロイーズ』

の影響が、じわじわとシャモニの谷にも忍び寄っていったのであろう。

また、ソシュールにしたところで、科学上の調査を行うためにモン・ブランに登ったとはいえ、「私は幼年時代から確かに山に魅せられていた。私は今もなお初めてサレーヴの岩を自分の手で触ったときの感動を、またその頂きからの眺めにいかに強く魅惑されたかをはっきりと覚えている」¹⁰⁾と述懐しているように、その原点にはまぎれもなく、登山行為自体に喜びを見出だすアルピニストの精神が息づいており、ルソーの山への情熱と相通ずるものがあると言えるだろう。両者は、お互いに意識せずとも、同じ流れの中に立っていたのである。

2. ルソーの植物採集登山

山の脱宗教化もしくは脱神話化と、それにとまなう山岳美の発見に加えて、科学的な動機づけも近代登山の重要な導火線のひとつとなった。確かにモン・ブラン初登頂以前にも、アルプスの山中深くまで入り込んで活動していた人々がなかったわけではない。水晶採りや薬草採りがそうだ。ただし彼らがピークハントに何の興味も持たなかったことはいうまでもない。

興味深いことに、植物学に造型の深かったルソーも、植物採集のため、しばしば山に登っている。ただし前述の薬草採りとは、動機の点で多少ニュアンスが異なることを断っておく必要がある。実用本位の薬草学を断固として軽蔑したルソーは、純粹に知的な好奇心から植物学の研究に情熱を燃やしているのだ。ルソーが行った植物採集登山もまた、桑原武夫の言う科学的登山の一形態として認めるべきか否かの議論はさておき、とりあえずは、その登山の模様をルソーがどのように描いているかを見てみよう。

ルソーが植物学に本格的な興味を抱き、熱心に研究するようになったのは、『エミール』の弾劾によってパリを逃れ、スイスはジュラ山中のモチエという小村に滞在を始めた1763年以降のことだ。その後、ルソーはパリ郊外のエルムノンヴィルで亡くなるまで倦むことなく植物採集を続け、その間には数多くの植物採集旅行を行っているが、高山性の植物を求めて山を目指したケースも少なくない。ジュラ山脈のロベラ、シャスロン (1,607 m)、珍しい植物の宝庫として有名なソ・デュ・ドゥーやクル・デュ・ヴァン (1,463 m)、グルノーブル近郊のラ・グランド・シャルトルーズ (2,087 m)、サンテチエンヌに近いピラ (1,434 m) などがそうだ。このうちルソーが詳しい記述を残しているロベラについて、次から見ていくことにしよう。

「かつて、判事クレール氏の山、ロベラのあたりで行った植物採集を私は一生忘れること

はあるまい」¹¹⁾と、ルソーは『孤独な散歩者の夢想』の第七の散歩に書いている。この場合「山 (montagne)」は高所の農園もしくは耕地を意味するヌーシャテル方言で、ロペラはシャスロン山の北斜面、標高 1,300 m 付近に位置している。この時の植物採集の描写は確かに特筆に値するものだ。ルソーは次のように続けている。

J'étais seul, je m'enfonçai dans les anfractuosités de la montagne et de bois en bois, de roche en roche je parvins à un réduit si caché que je n'ai vu de ma vie un aspect plus sauvage. De noirs sapins entremêlés de hêtres prodigieux dont plusieurs tombés de vieillesse et entrelacés les uns dans les autres fermaient ce réduit de barrières impénétrables; quelques intervalles que laissait cette sombre enceinte n'offraient au delà que des roches coupées à pic et d'horribles précipices que je n'osais regarder qu'en me couchant sur le ventre. Le duc, la chevêche et l'orfraie faisaient entendre leurs cris dans les fentes de la montagne, quelques petits oiseaux rares mais familiers tempéraient cependant l'horreur de cette solitude.¹²⁾

「窪地に入り込んでいった」とあるように、ルソーは尾根からではなく、谷に沿って登っていった。日当たりの悪い北側の斜面に加えてモミやブナの巨木が日光を遮る。腹這いになってやっと覗くことのできた絶壁は、おそらくアルプズの氷食谷であろう。第三章ですでに触れたルソーの断崖絶壁に対する嗜好が、ここにもまた表れている。

猛禽類の啼き声が恐怖心をいっそうあおるこの野生的な自然を、ルソーは《réduit》、《barrières》、《enceinte》といった城塞の比喩によって表現している。このことは次の引用からも明らかにされることになるルソーの被害妄想とも関連があるが、下界を見下ろす超越的な気分に加えて、迫害者に対抗しうる強さを自分のものにしたいという願望の表れでもあるのではないだろうか。また同時にそこは隠れ家(《réduit》、《refuge》)であり、外敵の侵入を防ぐ囲いの中である。自然から守られ、その奥深くに逃避するという意味合いも見逃すことができない。この自然は恐怖を催させる要素に事欠かないが、安全が保証されていればこそ、下界を眺める余裕も生まれてくるのだ。

この薄暗い城塞で、ルソーはいくつかの植物を見つけて魅惑的な気分に入る。

Là je trouvai la dentaire heptaphyllos, le cyclamen, le nidus avis, le grand laserpitium et quelques autres plantes qui me charmèrent et m'amuserent longtemps. Mais insensiblement dominé par la forte impression des objets, j'oubliai la botanique

et les plantes, je m'assis sur des oreillers de lycopodium et de mousses, et je me mis à rêver plus à mon aise en pensant que j'étais là dans un refuge ignoré de tout l'univers où les persécuteurs ne me déterraient pas.¹³⁾

ラテン名をまじえて植物を列挙するあたり、植物学者としてのルソーの面目躍如と言えよう。注目すべきは、ルソーが科学者として自然を客観視するにとどまっていないことだ。「植物学のことも忘れ」、「周囲の強烈な印象」に身をまかせる受動的な存在となり、苔の感触をも楽しみながら、夢にふけり始めるのである。この夢は、決して頭の中だけで渦巻く観念的瞑想や空想と同じものではない。第二章でも述べたが、単調で繰り返される身体的運動の緩やかなリズムによって、ルソーを取り巻く自然と一体化したときに初めて働く精神の動きであり、きわめて「身心相関的な (psychosomatique)」自然観照の術であると言えよう。このように身体の運動を通して、植物採集者ルソーは、客観的に自然を対象化してとらえる科学者から、自然と同化する夢想者へと変貌を遂げる。

科学的登山が近代登山の発生期におけるひとつの特徴的形態であったとすれば、それは、この登山が山を計量可能な物質として対象化するだけにとどまらず、山の自然とじかに向き合うことによって深い感動や悦楽を登山者が受け取ったからに他ならないだろう。ルソーも自然の研究を口実に山へ向かいながら、植物採集という本来の目的も忘れて山の自然に圧倒され、そのリズムと共鳴することを楽しんでいる。たとえ高山の征服に興味がなかったとしても、山を歩く喜びという、現代に通じる、あるいは現代においてはすでに失われてしまったかもしれない登山の原点を、ルソーは私たちに気付かせてくれるのではないだろうか。

結論

ルソーは山岳美を賞揚し、意識感情のレベルで人々を山に惹きつけ、登山ブームの火付け役として大きく貢献したが、これまでの研究では、風景美の観点という方向に若干かたより過ぎていた嫌いがなきにしもあらずである。社会的な影響力という点で、確かにルソーが果たした山岳風景に対する美意識の確立は、軽視すべからざるものであることに異論はないが、現代においてもなお、山岳文学に豊かな可能性を秘めた方向性を示しうるものがルソーの中にあるとすれば、それは歩行という身体の運動の中から山岳の自然を掴み取る、その方法論なのではないか。

田中清光は『山と詩人』において、「登山を題材とする詩の中で、その歩行を核とした身

体の運動と結び付いて、さまざまなイマジネーションや思念を発火させ展開させ織り上げてゆくという詩法がありうると思う¹⁾と述べている。その例として、たとえば宮沢賢治があり、山本太郎があるわけだが、歩行によって自然の中に溶け込んでいくことを自覚的に実践したルソーも、その系譜の中に加えられてしかるべきではないかと思われる。

古来日本には、歩行を通じた自然観照の方法が脈々と受け継がれていた。『伊勢物語』『更級日記』のような紀行文しかり。西行、宗祇、芭蕉のいわゆる三大自然詩人は、いずれも当時きつての旅行家に数えられる。股旅物に描かれる富士山や筑波山などは、この「一種肉体的な自然観照の伝統」²⁾を類型化したものであろう。さらには比叡山の千日回峰のごとき「歩行(ほぎょう)」もあって、この場合は悟りや解脱を目指すものであるが、たとえそこまでゆかなくても、自然の中を歩くことによって自分自身を発見し、歩くという行為自体に喜びを見出だす伝統が、今日なお根強くいきづいているといえる。ルソーの描く自然が日本人に広く受け入れられやすい傾向にある理由のひとつには、このような伝統と共通する要素をルソーが持っているからではないかとも思われるが、この点も含めて、洋の東西における山岳観の相違に関しては、今後の課題としていきたい。

注

(第1章)

1) Claire-Eliane ENGEL, *La Littérature alpestre en France et en Angleterre aux XVIII^e et XIX^e siècles*, Chambéry, Librairie Dardel, 1930, p.24.

その他、アーノルド・ランも『登山百年史』(1957年)——『世界山岳名著全集』(あかね書房, 1967年)別巻所収——37ページ以下の「イデオロギーの山々」と題された章で、「ルソーの山への敬慕は、彼の政治哲学に基づく観念論的推断であって、(……)彼は山との共鳴を、いかなる現実との粗野な接触にさらす危険を冒さなかった」と述べているが、このような考え方は、ルソーの山のある一面しか言い当てていないように思える。

2) 桑原武夫「山岳紀行文について」——『桑原武夫集』第一巻(岩波書店, 1980年)所収——94ページ。

3) A・ラン前掲書 25ページ。

4) C=E・アンジェル前掲書 24ページ。

5) Daniel MORNET, *Le Sentiment de la nature en France de J.-J. Rousseau à Bernardin de Saint-Pierre*, Genève, Slatkine (Réimpression de l'édition de Paris, 1907), pp.259-60.

6) ケネス・クラーク『風景画論』(岩崎美術社, 1967年) 35ページ。

7) Jean-Jacques ROUSSEAU, *Œuvres complètes*, Paris, Gallimard, 《Bibliothèque de la Pléiade》, 1959-95 (以下 O.C. と略す), II, p.79.

8) その前の年、すなわち 1760 年の末にオランダですでに印刷され、ロンドンで売られているが、評判になったのはパリで売り出されてからのこと。ちなみにスイスでは冷ややかに受け入れられたという。

9) O.C., I, p.431. (イタリック体による強調は筆者のもの。以下同様。)

10) 「私はいつも水を情熱的に愛してきた。」(O.C., I, p.642.) など。

- 11) *O.C.*, I, p.393.
- 12) *O.C.*, II, p.515.
- 13) *O.C.*, II, p.518.
- 14) Alexis FRANÇOIS, *Revue d'histoire littéraire de la France*, 1924, pp.206-224. cf. *O.C.*, I, p.1457.
- 15) *O.C.*, II, p.515.
- 16) *O.C.*, II, p.518.
- 17) *O.C.*, II, p.74.
- 18) 日付による。実際には 1779 年 4 月 10 日。
- 19) C = E・アンジェール前掲書 27 ページ。
- 20) D・モルネ前掲書 260 ページ。

(第 2 章)

- 1) *O.C.*, IV, p.600.
- 2) *O.C.*, I, p.162.
- 3) *O.C.*, I, p.410.
- 4) Marcel RAYMOND, *Jean-Jacques Rousseau, la quête de soi et la rêverie*, Paris, José Corti, 1962, p.159.
- 5) *O.C.*, I, p.1048.
- 6) *O.C.*, I, p.1045.
- 7) *O.C.*, I, p.1047.
- 8) 中村雄二郎『共通感覚論』(岩波書店, 1979 年) 52 ページ。
- 9) *O.C.*, IV, p.1093.
- 10) *O.C.*, IV, pp.391-2.
- 11) *O.C.*, IV, p.396.
- 12) 中村雄二郎前掲書 110 ページ。
- 13) *O.C.*, IV, p.389.
- 14) Gaston RÉBUFFAT, *La Montagne est mon domaine*, Paris, Hoëbeke, 1994, p.19.
- 15) 小林享『移ろいの風景論——五感・ことば・天気』(鹿島出版会, 1993 年) 29 ページ。
- 16) *O.C.*, I, p.162.
- 17) *O.C.*, I, p.162.
- 18) オットー・フリードリッヒ・ボルノウ『人間と空間』(せりか書房, 1988 年) 105 ページ。
- 19) O・F・ボルノウ前掲書 106 ページ。
- 20) *O.C.*, II, p.471.
- 21) *O.C.*, II, p.475.
- 22) O・F・ボルノウ前掲書 114 ページ。
- 23) *O.C.*, II, p.79.

(第 3 章)

- 1) *O.C.*, I, p.172.
- 2) *O.C.*, II, p.77.

- 3) *Correspondance complète de J.-J. Rousseau*, annotée par R. A. LEIGH, Genève, Institut et Musée Voltaire, 1965-95, tome XV, pp.116-7.
- 4) *O.C.*, II, p.77.
- 5) *O.C.*, II, p.79.
- 6) 河村民部『山頂に向かう想像力』（英宝社, 1996年）190 ページ。
- 7) 河村民部前掲書 194 ページ。
- 8) もちろん自然の背後にひそむ理神論的な超越者の存在は, ルソーの場合にも否定できない。
- 9) *O.C.*, I, pp.172-3.
- 10) *O.C.*, IV, pp.1093-4.
- 11) M・H・ニコルソン『暗い山と栄光の山』（国書刊行会, 1989年）95 ページよりの引用。
- 12) 同上。
- 13) M・H・ニコルソン前掲書 419 ページよりの引用。
- 14) *O.C.*, I, pp.58-9.
- 15) *O.C.*, I, p.57.
- 16) *O.C.*, I, pp.57-8.
- 17) *O.C.*, I, pp.99-100.
- 18) *O.C.*, I, pp.101-2.
- 19) *O.C.*, I, p.324.
- 20) *O.C.*, I, p.325.
- 21) *O.C.*, II, p.77.
- 22) *ibid.*
- 23) *O.C.*, II, p.78.
- 24) *O.C.*, II, pp.78-9.
- 25) D・モルネ前掲書 270 ページ。

(第4章)

- 1) エリック・ニュービー『世界登攀史』（草思社, 1981年）20 ページ。
- 2) トニー・ヒーベラー「初登頂——アルピニストの活躍」——『図説百科 山岳の世界』（大修館書店, 1981年）所収——212 ページ。
- 3) 桑原武夫「登山の文化史」——『桑原武夫集』第一巻（岩波書店, 1980年）所収——473 ページ。
- 4) Horace Benedict de SAUSSURE, *Premières ascensions au Mont-Blanc*, Paris, François Maspero, 1981, p.205.
- 5) C = E・アンジェル前掲書 71 ページ。
- 6) 例えば桑原武夫「登山の文化史」（前掲書 476 ページ）を参照のこと。
- 7) C = E・アンジェル前掲書 75 ページ。
- 8) C = E・アンジェル前掲書 71 ページ。
- 9) C = E・アンジェル前掲書 71 ページ。
- 10) H = B・ドゥ・ソシュール『アルプス旅行記』序巻（馬場勝嘉「モン・ブランの初登頂」——『世界山岳名著全集』（あかね書房, 1967年）別巻所収——284 ページよりの引用。）
- 11) *O.C.*, I, p.1070.

12) *O.C.*, I, pp.1070-71.

13) *O.C.*, I, p.1071.

(結論)

1) 田中清光『山と詩人』(文京書房, 1985年) 217 ページ。

2) 大岡昇平『俘虜記』——『大岡昇平全集』第二卷(筑摩書房, 1994年) 196 ページ。